

別府温泉繁昌記 六

菊池幽芳

▲別府温泉繁昌記結論（上）

次に別府浜脇ではどういう風に温泉を湧出させて居るかといふと二ツの方法で営まれて居る。即ち一は自然湧出と一は人為湧出である。自然湧出は読んで字のごとく自然に湧出するところを多少掘下げ浴槽を設けて居るので、これを掘湯と称するが共同温泉場は大抵それである。次に人為湧出は深い突井で湧出せしめこれを浴槽に引揚るので、これを突湯と称する。従来は全然無かったものであるが明治廿五年ごろから始めたので、このごろはこの突湯なるものが非常に殖えて居る。

別府浜脇の町民は無心にこの突き湯をやり出したのであるが、これが別府温泉の将来のために極めて憂ふべきものである。なぜと云へば突湯は掘湯に大なる影響を興ふるからで、別府のような温泉の豊富なところであるか

らこそまだ甚だしい影響はないが、現に従来の湯の湧出量の多少減しつゝある事と掘湯の水準面の低下しつゝある事は認められて居る。これは実に寒心すべき事で、股鑑遠からず熱海温泉にありである。熱海は関東における著名な温泉場で、また温泉場の殆んど総てが山の中にあるに引きかへ、これは海岸にある温泉場で、この点においていくらか別府に似て居る。尤も熱海温泉は間歇泉である。この熱海温泉がどうしたのかといふと従来一昼夜に六回の噴出があつたものが、兩三年前町民が徒らに私利に走り突井を濫穿し始めたところから、間歇泉の噴出が最近になって一昼夜僅かに三回となり、且大湯の量が著しく減じたゝめに温泉場全体に大打撃を被むるに至つた。為に昨今熱海町の死活問題として紛擾を極めて居るのであるが、別府のような温泉の無尽蔵を以て目されて居るところでも濫穿をやればその結果は真に恐るべきものがある。殊に泉脈の上部に当たって深い突井を掘れば直ちに影響するのであるから、突井に就ては何か今の中に嚴重な規約を設けて置くが必要であると考へる。実際には規約が出来て居るかどうかは知らんが、もし無いと

すれば雨降らざるに牖戸を網繕する事を勧めて置くのは決して早計ではあるまい。

最後に僕は、別府温泉繁昌記の結論として少し気焔を吐く。僕は別府温泉場に日本一といふ肩書をつけた。それは温泉の豊富なる事において、その湧出区域の広大なる事においてまた他にその比を見ないからである。併し設備其の点においても果して日本一たる肩書に反かないかといふと……さうはいかぬ。その点においては箱根、有馬、道後その他有名の温泉に比して遜色がある。されば、この点を将来大いに改良するならば、その時こそ真に日本一の温泉場たるに恥ぢぬ大温泉たるの実を挙る事が出来るので、この意味において別府は他の温泉場の決して企及する事の出来ぬ極めて有望なる将来を有して居るのである。別府人はこの天恵によって大いに発展し、日本の温泉場たる実を全くする為に対温泉策を定めなければならぬ。

▲別府温泉繁昌記結論（下）

まず、付近温泉場を打つて一団となし、その間大聯合

を形作る事は最も必要である。統一ある聯合を形作ると共に各温泉場間に交通の便を開く事はまた最も急務である。今日でも無論道はあるが、概して不完全で地獄めぐりなどをするには途なき途を通らなければならぬ。地獄を呼ぶものとするは誰にでも行けるやうにしなければならぬ。そこで聯絡を取るべき重なる温泉場を便宜のため列記して見ると、

亀川温泉	別府より一里余
芝石温泉	同 二里
鉄輪温泉	同 一里半
明礬温泉	同 二里弱
堀田温泉	同 一里十町
観海寺温泉	同 一里弱
塚原温泉	同 三里
由布院温泉	同 四里半
湯の平温泉	同 七里

等で右の中塚原以下の三温泉場は僕の行ぬところだが、

いづれも近県に名の知られた温泉場である。これ等の温泉場を合せた別府温泉は、実にその実質において日本はおろか世界にも余り類があるまいと信ずる。またどれほど多くの浴客を収容しても綽々として余裕があるのである。

今日のところでは立派な温泉を持って居ながら、上流の人が続々入浴にこられてはとも満足な待遇は出来ないのである。西洋人などに対しては何の設備もないのである。たゞ平民的木賃制度においてのみ非常に発達したのだから、その方は無論それで保全して置いて、別に大いに上中流の浴客を吸収する方法を講じなければなるまい。今日まで別府の実質はまだ大いに世に知られて居らぬのと、交通の不便なため近府県以外の客を呼ぶ事は困難であったが、別府温泉も既に大いに世の中に広告されつつあり、九州鉄道もその中に別府まで通ずる筈であるから、さうなれば商船会社の汽船よりするものと相待つて、入浴者は非常に増加するのであらう。現に商船会社は今年の夏から往復三割引を實行してゐるし、旁々京阪からの浴客が今年は非常に多いさうである。また世間に知

れ渡るにつれて、大いに台湾滿韓方面の客を吸収するこゝとが出来やう。これは別府温泉の強味である。外の温泉場は温泉の量に限があるが、別府は大いに経営し大いに客を呼んで多々ますます弁ずるのであるから、今の中に須らく積極的に大いに経営し、大いに客を呼ぶの策を講ずべきである。別府人がぐづぐづして居れば他県人が入込んで大いに投資しその利を壟斷するものが出来ぬとも限らぬ。別府人のまさに緊禪一番すべきところであらう。

温泉の経営と同時に娯楽機関の設備、飲食店の改良、遊廓の区域制限、公園の経営等も閑却すべからざる問題である。いくら温泉の実質がよくとも愉快に消光の出来る設備がなければ客は決して長く止まって居るものではない。今後の温泉の客は、病人と保養客と全然二ツに分れて保養客が最も多く金を蒔いて行くのであるから、この方の客を盛んに呼ぶ設備が整はなければ、別府の眞の繁昌は期すべからずで、今日春先に見えるやうな、五円か七円の金を持って来て十日も滞在する湯治客が五万来ても十万来ても格別別府の潤にはならぬのである。別府の

人がよくこの邊の消息を解し、前記の改良を着々として実行されたならば求めずして客を吸収することが出来るので、またさうなつた暁には一たび別府へ遊ばずんば共に日本の温泉を語るに足らずといふやうな事にもなるだらう。その時は日本一の温泉知たる実が初めて挙がるので、僕の紹介の労も徒爾とじに帰せぬ事となるのである。その時において僕は重ねてまた大いに別府を紹介しやうと思ふ。

最後に二三遊樂地を紹介して筆をおくことにしよう。

▲別府の遊樂地

・公園 は四十年秋皇太子殿下の御巡遊を期して創設されたので、山手の観海寺行の道筋に当る。園内に御座所を新築しこゝに御駐驛ちゆうひやくあらせられた。地は一帶の松原で後に鶴見岳を負ひ、前は別府湾に臨み、眺望頗る快瀾、極めて明麗めいれいの地域である。経営宜しきを得ば立派な公園となるであらう。

・躑躅園つとじゆん は公園より観海寺道に沿ふて上のほる事数町の處にある。園内凡およそ四千坪満目悉く躑躅で花盛りの頃は

左こそと思はれる。これも大いに経営すれば別府の呼場所となるであらう。

・朝見八幡 老樹森々幽邃ゆうすいの境で、ここに朝見温泉がある。ここから吉備山の山腹を過より六枚屏風の谷間を分入れば、高さ七丈の鮎返りの瀧がある。途少し険であるがそれを厭はぬものは是非とも探険すべしだ。また付近には乙原の瀧といふ雌雄の瀧がある。

・松原 別府町内の娛樂地で、劇場、大弓場、勸商場、室内射的場等軒を並べ、又売店には名産竹細工、櫛、漆器、器具等売つて居る。竹細工は有馬から師を聘して学んだので全然有馬式である。器具漆器類は重に別府工芸徒弟学校の製作品であるが、これはなかなか上等のものが出来る。

・筑紫富士 由布岳は山容の富士に似たところから豊後富士また筑紫富士の称あり。鎮西名山の一である。海拔四千八百尺、完全な円錐體を形成し、山巔さんてんまで三里余り、鶴見岳と共に健脚家の是非はんちゆう攀登すべきところである。

・春日浦 別府と大分の間は三里でこの間に電車を通ず

る。春日浦は大分の春日公園の一部であるが、老松海岸に連なり得ならぬ風光を呈して居る。一にまた神宮寺浦と称し、大友宗麟が葡萄牙と貿易をした古跡である。

・百合若大臣塚 百合若大臣の話はよくお伽話や何かで聞いたものであるが、百合若大臣がその愛姫萬壽姫の為に建立したと云ふ萬壽寺が大分にある。蔣山と題して趙子昂の榜額のかゝつた有名な禪寺であるが、其寺から四五丁の畝中に百合若大臣の塚と称せらるゝ古墳がある。また、尾越町の付近には百合若大臣の附人である大臣を陥おとしれた別府太郎次郎の古墳と云ふのがある。別府へ来て百合若大臣の研究をするも面白からう。

(その中に僕も是非書いて見るつもりでいる)。
・岩面の古彫刻 大臣塚と相距る事遠からず、元町といふ部落の裏手の崖に刻んだ一丈余の薬師如来がある。敏達天皇の御宇百済の僧日羅にちらが刻んだものであると口碑に残って居るが、崇高端麗の姿態たしかに千年以上古名工の手になったものたるを示し好古家美術家の一見に値する。

・田染の大石像 石像の序に是非とも紹介すべきは別府と宇佐八幡との中間中山香村なかやまがより一里半山に分入つ田染村字熊野の社内老杉翁鬱たる中にある希有の大彫刻物である。それは五丈程の高さの凝塊岩に大日如来と不動明王を彫んだもので、両方とも三丈からの巨大のものである。不動明王の方は新しいやうであるが、大日如来の方は養老年間仁聞菩薩の刻んだものと伝へられ、大威靈に充ちた其の風貌座まどろに人を庄するものがあつてこれも千年の古彫刻なるを偲しのばしむる。惜しいかな山間の僻地へまにあるので世間に知られて居ないが、こんなものが都会附近にあつたら極めて有名のものになつたに相違ない。

・右の外、石垣の鬼の窟(古墳)、石垣原古戦場、実相寺山、四極山、笠結島、的ヶ浜、柞原八幡等見るべき名所遺蹟少なからずで、湯治の余暇に見物し廻つたら殆ど飽く事を知らぬであらう。(完)

菊池幽芳 (明治三〇昭和二二) 明治二四年大阪毎日新聞記者となり、傍ら新聞小説を執筆した。大衆文学者